

第13回検討会でのご意見



阿賀野川河川事務所
令和5年11月30日



第13回 阿賀野川自然再生モニタリング検討会 議事概要

【開催概要】

開催日時：令和4年6月30日(木) 13:30~15:30

開催場所：阿賀野川河川事務所 2階会議室

議事次第：1. 開会

2. 議事

- (1) 令和3年度モニタリング結果報告
- (2) 今後の整備予定箇所状況
- (3) 沢海地区における浅場の再生について
- (4) 阿賀野川自然再生の今後の進め方

3. 閉会

【議事】

(1) 令和3年度モニタリング結果報告(説明資料1)

(A委員)

- 小阿賀樋門について、隔壁の形状により成果が変わるということは理解できた。今後は、この調査箇所を確認されたサケの個体数が、阿賀野川全体のあるべきサケの遡上個体数、目標に対してどの程度なのかを整理していくことが重要ではないか。

(事務局)

- 阿賀野川が目指す健全な度合いとその場合のサケ遡上数については、設定できていない。今後委員と相談して設定していきたい。

(A委員)

- 水ヶ曾根について、水路が自然の営力で拡大していき、砂礫河原となることを目指しているとする、幅をもう少し広げないと、礫河原形成を望めない。水路の維持については、北海道の標津川の事例でも、寒地土研の実験でも、2つの水路を維持することは困難であることが分かっている。水ヶ曾根は、第3は埋まり、第2が残るのではないか。

(事務局)

- 水路を維持することではなく礫河原の形成を目標としているが、大きな出水でも1回では礫河原は形成できていない。水路については埋まってもよいとして、整備をしていくことも考える。

(2) 今後の整備予定箇所状況(説明資料2)

(B委員)

- 沢海地区について、現在するワンドの下流側が阿賀野川の本来のワンドの形状であると思う。今後目指すワンドのモデルになるので、丁寧に調査するとよい。また、連続性の確保については、写真で紹介された落差であれば既存の魚道をうまく配置すれば連続性を確保できるであろう。

(事務局)

- 連続性確保の具体的な対策については、事例を収集して、検討する。

(C委員)

- 連続性確保では、本川との落差の解消が主目的だろうが、上流側(堤内)の連続性も重要である。樋門樋管の落差等だけでなく、産卵場までの遡上経路全体の整備を希望する。

(事務局)

- 越後平野生態系ネットワーク推進協議会に、農水省関係機関が入っているため、問題提起し、連携した取組を行うよう働きかけていく。

(D委員)

- 沢海地区について、対象地のワンドの下流に船着き場があるが、そこでカミツキガメ、ミドリガメなどの外来種が採集されたため、外来種を駆除してほしい。駆除には、漁業協同組合も協力する。

(3) 沢海地区における浅場の再生について(説明資料3)

(E委員)

- ハクチョウのねぐらの環境条件は、多くの調査地点のデータと比較するとよい。

(事務局)

- ハクチョウの生息環境は、横雲橋だけでなく、他にも確認し、今回設定した条件を、阿賀野川のほかの生息地でも整理してみる。

(A委員)

- 沢海地区の平均年最大流量時の滞筋が、本区間の落ち着く形状といえる。今後、数字を詰めていくときに参考になるだろう。

(事務局)

- 平均年最大流量を意識して確認する。計画では、3年としているが、少しずつ様子を見ながら整備していったり、切り方を変えていったりということなども考える。物理環境、水路の形状等を把握し、他でも活用できるようにする。

(B委員)

- 沢海地区について、現在の案ではワンドをなくす案となっているが、自然の営力で形成されたワンドをなくしてしまうのは、考え方としてどうなのか。堆砂の問題で、ワンドを残して整備しても、結果としてワンドが埋まることは理解できる。安田先生ともご相談し、今後検討し、方針を立てるとよいのではないか。

(D委員)

- 浅場兼ワンドがあったほうが良い。魚類の産卵場所は浅場、ワンドである。

(事務局)

- ヤナギの再繁茂の課題があるものの、ワンドを利用する案も検討している。委員の意見を聞き、ワンドを残す案も含めて検討したい。

(4) 阿賀野川自然再生の今後の進め方(説明資料4)

(A委員)

- 自然再生の技術の確立のために、測ること(計測)を重視することを提案したい。他分野では、実測とシミュレーションを組み合わせて精度を上げており、本事業でも、様々な技術の計測を試していくことで、自然再生、流域治水において技術をステップアップできるのではないかと。

(事務局)

- 物理環境を計測することに取り組んでいく。

(B委員)

- 砂礫河原について、第3水路の出口に寄州が形成されているが、この寄州にカワラハハコなどが生育するのが普通の姿である。水路を掘削したことで形成されたのか確認する必要があるが、寄州ができること自体が重要ではないかと。

(事務局)

- モニタリングの中で確認していく。自然に砂礫河原ができていく可能性があるため、なぜ形成されたか確認したい。

(D委員)

- 今の自然再生の整備は、河川工事にみえる。昔のワンド環境を参考に、ワンド整備は、ヘドロの浚渫など、少しの改変でよいのではないかと。

(事務局)

- 自然再生の取組は、昔の川の姿や、かつての河川環境に近づけるもの。引き続き、ご意見を伺いながら取り組んでいく。

以上